



長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。大阪大第2内科入局。1995年、京大二庫県尼崎市で「在宅医療」を総合診療や「痛くない死」を目指す。近著「痛くない死」は、西国際大学客員教授。

「患ひの元知れずして病み寄りし人らの苦しみいかばかりなりし」

これは、平成25(2013)年に天皇、皇后両陛下が初めて熊本県水俣市を訪れた際、天皇陛下が詠まれた歌です。

私は先週末、水俣市医師会が主催する市民講演会に2年連続でお呼びいただきました。その前日、この歌碑のある公園や水俣病資料館を見学し、水俣病の悲しい歴史に触れました。戦後最大の公害病である水俣病をめぐる問題は、平成が終わろうとも絶対に私たち国民が忘れてはならない出来事だという思いを強くしました。

母親の胎内でこの病に侵された胎児性患者の人々は、今もなお、苦しめられているのです。水俣病患者の救済にも大きな力

80 国会議員 園田博之



水俣病患者の救済に尽力

園田議員は、政治家だった父・直(すなお)氏が亡くなったことを受けて、1986年に初出馬。このとき、対立候補はなんと継母(直氏の後妻で博之氏は前妻の息子)であった園田天

を注がれたのが熊本出身の国會議員、園田博之氏でした。しかし11月11日に東京都内の病院で亡くなりました。76歳、肺炎で

光光氏。天光光氏は、戦後間もない46年に餓死防衛同盟から立候補、日本初の女性議員のひとりでした。

「骨肉の選挙」と言われた選挙は息子が勝利し、その後、自民党離党と復党を繰り返しながらも、当選11回、落選はありませんでした。晩年は政界のご意見番的な存在でしたが、闘病のため、あまり表舞台には立っていませんでした。実は今年の春からは、入退院を繰り返していたそうです。がんの治療に加えて、もしかしたら肺炎治療を行っていたのかもしれない。

日本人の死因の第1位はがんですが、男性の第1位は肺がんです(女性は第2位)。肺がんは進行するにつれて咳や痰、息苦しさ、胸の痛み、顔のむくみ、嚥下(えんげ)障害などの症状が現れてきます。最終的に骨や

脳に転移すればその症状が前面に出てくることもあれば、がんが併発した肺炎を繰り返すというケースも経験します。

通常の肺炎や肺がんが気管を閉塞(へいそく)して起こる2次性肺炎に加え、高齢者の場合は誤嚥性肺炎もおこります。誤嚥性肺炎は食べ物の誤嚥ではなく多くの場合、夜間睡眠中に唾液が肺の中に垂れ落ちて起こります。だからその予防法はこまめな口腔ケアと嚥下のリハビリです。「胃ろうにして食べさせないことが誤嚥性肺炎の予防」と思っている人が多いようですが間違いです。肺がんや誤嚥性肺炎があっても最期まで口から食べる楽しみを奪わないことが大切です。そのために緩和ケアという医療があることを知っておいてください。

さて、水俣病の問題は、いまだすべてが解決したわけではありません。園田議員もきっと空から見守ってくれていることでしょう。